
B・B

切香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B・B

【Nコード】

N1376E

【作者名】

切香

【あらすじ】

西部劇なBLEACH目指します。岩と砂、そして疑惑に覆われた地「流架」。単身、潜入捜査に乗り込んだ日番谷と、次々と集結した死神達が直面する、戦慄の事実とは？別連載FLAME、AF TERRAIN続編。オリジナル色が強いので、苦手な方は閲覧をご遠慮ください。

1・銀系の雨（前書き）

別連載、「BLEACH in FLAME」と、「AFTER RAIN」の続編です。

2008/8現在、まだ「AFTER RAIN」は終わってませんorz

この二編が終わった後に、連載再開予定です。

1・銀系の雨

水の入った盆を一気にひっくり返したかのように、土砂降りの雨がボクを叩く。

赤く濡れた、血染めのボクを、洗い流していく。

雨はボクの頭を伝い、肩を伝い。ボクが手にした刀へと流れてゆく。

刀にべつとりとこびりついた赤をも、洗い落とす。

でも、洗っても洗っても拭い去れてない。どんどん広がる足元の赤を、ボクは見下ろす。

刀を握り締めたままボクの目の前に倒れてるんは、ボクと年恰好が同じ、子供。

振り上げば、雨の轟音を上回るような歓声がボクを包んでた。

「市丸ギン！ついに百戦百勝目をあげました！」

「百万環でどうだ！」

「いや、それくらい金では、ギンは譲れんな」

周りの大人たちの声なんか、聞きなれたモンや。

どうせ、値段が一千万環になったところで、あのオヤジはボクを手放したりせえへん。

いい・・・客寄せやからな、ボクは。

「ギン」

女の声が聞こえた・・・と思った瞬間、視界が暗転する。
なんや？

声のほうを見たボクの目に、ボンヤリと女の輪郭が浮かび上がった。その白い、細い右腕からは、今まさに怪我をしたかのように、鮮血が滴っている。

「ギン。あんたは・・・」

その女は、それだけ呟くと、ボクに向かって、ゆっくりと手を伸ばしてきた。

微動だにせんボクの目の前に、女の腕を伝った血が、ゆっくりと雫の形をつくる。

膨らんだ雫が、ゆっくりと女の腕から離れて、宙を舞う。

- - - - -

ポチャン。

市丸ギンは、耳元に響いた水音に、ふっと目を開けた。横たわったまま、窓を見上げる。

窓から見える空は、曇天。雨の雫が、窓ガラスを静かに濡らしていた。

一時期毎日のように降り続いた雨は、5月になって嘘のように影を潜めた。

そして今静かに降り注ぐ朝の雨は、緑を育み、短い生の謳歌へ誘う、夏のそれに変わろうとしている。

市丸は、もう一度目を閉じる。そして、周囲に誰一人いないことを確認する。

ふう、とため息がその喉から漏れた。

ゆっくりと上半身を起こし、机の上に置かれた水差しを取り上げる

と、直に口をつけて一気に中身をあおった。
こぼれた水が、細い喉を伝った。

その体格は190センチ近い長身で、体も鍛え上げられているのが
ひと目で分かる。

しかし、その首元や手首、腰や足首は細く締まっており、色の白さも重なって、実際以上にその体格を華奢に見せていた。

その髪は銀髪。

白い単が、血の気のない肌を覆う。

薄暗い部屋の中で、その姿は白くけぶって見えた。

口元を右腕で拭ったとき、市丸の目は、その右腕に吸い寄せられる。
その長い腕には、何かで斬りつけられたような細い刀傷が残っていた。

男にしては細長い指で、そつ、とその傷に触れる。
傷をなぞるその表情は無心で、感情は読み取れない。

不意に、視界の端で、何かが揺れた。

それだけの变化に、市丸の鋭い一瞥が投げられる。

閉じられたかのように細い目が少し見開かれ、のぞいた瞳は驚くほど、紅い。

障子の向こうで、ぼんやりと、小さな影が風に吹かれて揺れていた。
市丸は物憂げな動きで立ち上がると、障子を開けて廊下に足を踏み出した。

ヒタヒタと雨の音が突如大きく聞こえ始める。

絹糸のように細く天から落ちる雨に視線を泳がせた後、市丸の視線は、廊下にぼつんと置かれたそれに注がれた。

シンプルなガラスの花瓶に入れて置かれていたのは、金色に輝く一

輪の花だった。

太陽のように明るい色彩のその花は、どこからも差してこない太陽の光にとまどうように、すこし萎れてそこにあつた。

こんな近くに来られて、ボクが目エ覚まさんなんて・・・

思い当たる人間はひとりしかいない。市丸は花瓶を手に取り、周りを見回した。

2・金盞花

「金盞花、ですか」

花瓶ごと執務室に持ち込んだ花を見た吉良は、開口一番そう言った。

「キンセンカ？どつかで聞いたような名前やな」

花瓶を執務室の窓際に置くと、ギンはうーんと背伸びをする。

ただでさえ高い身長が、ぐんと大きく見えた。

その長身を、副隊長の吉良は、どこか恨みがましい目で見上げた。

「この隊の隊花じゃないですか、金盞花は。隊に余程関心がないんですね、あなたは」

「そんな訳ないやん。ボクは毎日三番隊のことばかり考えとるで・・

にしても、なーんか、能天気な花やなあ」

市丸は、陽光をそのまま持ってきたかのような、明るい黄色の花弁を見下ろした。

「隊花」は、代々隊長によって代わり、隊長と副隊長のイメージから名づけられる。

例えば朽木率いる六番隊は「椿」高潔な理性」、日番谷の十番隊は、雪中花の異名を持つ、水仙。

更木が隊長の十一番隊に至っては、「鋸草のこくさう」戦い」で、そのまま氣質を表している。

しかし自分といい、いつも湿度の高い吉良といい、こんな明るい色彩の花は似合わないと思うが。

吉良は分厚い書類の山にひとつひとつサインしながら、ちらりと花を見やった。

「寂しさに耐える。失望、絶望。別離の悲しみ。そんな花言葉があ

るそうですよ。

日が沈むと同時に花が閉じるから、太陽との別れを惜しんでいるように見えるからだとか」

「ふーん」

「まあ僕は今、市丸隊長がいつまでたっても席についてくれないのを寂しく思ってますけどね。

失望してるって言うてもいいくらいです。

貴方が執務室をこのまま去った日には悲しみというか、絶望を覚えますよ、僕は」

小さな早口でそう捲くし立てると、吉良は何事もなかったかのように書類に目を落す。

「イズル？」

「・・・」

吉良は名を呼ばれても市丸の方を見ず、まっすぐに視線を向けるのは隊首机。

「あー、もう分かったわ。働けばいいんやろ」

投げやりに言ったギンは、ちらりと窓の外を見やった。

「あらら。十番隊長さんに乱菊やんか。隊務やろか」

ギンの視線の先には、なにやら話しながら道に行く、日番谷と乱菊の姿があった。

無茶な任務でも依頼されたのかもしれない。

日番谷が不機嫌そうに腕を組み、はあ、とため息をついている。

それを、傍らの乱菊が、まあまあ、となだめるのが見えた。

ボン、と日番谷の背中を叩いた乱菊の横顔は、まるで姉のようだ。

穏やかな顔、するようになったな。

「市丸隊長！はやく席についてください」

「わかったって」

市丸はため息をつき、室内を振り返った。
振り向きざまに着物の袖が触れ、ゆれる金盞花の向こうで、乱菊の
笑い声が聞こえた。

「今回の指令について何か質問は？」

「いえ・・・特には」

一番隊隊舎で向き合っているのは、山本総隊長と十三番隊隊長の浮
竹だった。

無表情の山本総隊長に、温厚な表情をたたえた浮竹は、やや苦笑い
気味に続けた。

「あえて言えば、あの日番谷隊長が、よくそのような任務を引き受
けましたね」

「お主がやらぬなら草鹿しか出来ぬ、といったら引き受けおった」

「それは・・・まあ、その通りですが」

日番谷の性格をよく見ている、と浮竹は心中思う。

先輩の隊長や総隊長、権力を握る貴族や中央四十六室に対して、日
番谷は遠慮というものをしない。

歯に衣着せない物言いは、幼さから来る率直さを越えて、不遜なイ
メージをもたれがちだ。

しかし少し付き合ってみれば、それだけではないことにすぐ気がつ
く。

例えば、目下の人間には概して彼は優しい。譲り、庇ってやってい
るところを何度も見た。

副隊長の松本乱菊しかり、草鹿やちるもしかりである。

「それに、日番谷隊長もよく分かっておる。

このような事態を野放しにする訳にはいかんと」

山本総隊長の声に、浮竹はため息をつきながら、渡された資料をめ

くった。

「人身売買組織、ですか。しかも霊圧がある子供の」

「流魂街に住む地位ある者にとっては、霊圧ある人間は喉から手が出るほど欲しいものじゃ。」

護衛の意味はもちろん、霊圧ある者を抱え込むのは権力の証ともなる」

「しかし・・・霊圧のある人間は、精霊廷ならとにかく、流魂街には滅多にいないはず」

「いないからこそ浚^{ぬぐ}ってくるのじゃよ。」

一般の流魂街の住人にとっては、霊圧ある者は畏怖の対象になることが多く、そのため仲間も得にくい。

浚われたところで、胸をなでおろす者も多いことじゃろっ」

浮竹は、それには答えず、唇を噛んだ。

「そして・・・集めてきた子供同士を客の前で戦わせ、値決めをする？」

そのような非人道的なことが・・・」

「確かに、今回の任務には人道的な意味もある。

それに、そのような子供が力をつけては、精霊廷自体を脅かすことにもなりかねん。

十番隊に潜入調査を任せた。お主の隊は摘発を頼む」

「分かりました」

浮竹は目を閉じて頷いた。

貴族として精霊廷に生まれた浮竹には、流魂街の暮らしは想像の範囲を出ない。

もちろん隊務として流魂街に出ることは日常的にある。

しかし、そこに住む者たちが何を思って生きているのかは、結局のところ分からぬ。

でも、あの2人は違う。

日番谷と、それを支える乱菊は、子供時代を流魂街ですごした死神の1人だ。

強い霊圧を流魂街で持つということの意味を、恐らく誰よりも知っているはずだ。

その二人が、自ら体を張って潜入業務に挑むという。

それだけで、自分が全力を尽くす理由には十分だと思えた。

「そして、十三番隊だけではない。もう一隊に、影の任務を命じた」
続く総隊長の声に、浮竹は顔を上げた。

「三隊も出陣とは」

正直、驚いていた。

たかが流魂街での反乱に、護廷十三隊のうち三隊までが出撃するのは。

そして、それを見返す総隊長の目が、かすかに笑みを含むのを見た。

「・・・は？」

その名前を聞いた浮竹は、あからさまに驚いた顔をした。

「いや、お言葉ですが・・・あのふたりの相性は、決して良くはないかと」

「そうかの」

皺に埋もれた総隊長の顔には、確かに悪戯っぽい笑みが一瞬はしった気がした。

「僕は、それほどでもないと思っているのじゃが」

山本総隊長は、二千年もの間、精霊廷の死神を取り仕切ってきた老獯。

人を見る目がどれほど確かか、彼の薫陶を受けてきた浮竹も分かっている。

「先生の決断なら。それで、その地の名前は？」

「南流魂街、九十番地区『流架^{ルカ}』。神も知らぬ地の果てじゃ」
浮竹の問いに、山本総隊長は重々しく返した。

3・紅のデジャ・ヴ

「ちっ、うっとうしいな・・・」

十番隊の自室では、日番谷が舌打ちをしながら、隊首羽織をかなり捨てていた。

それだけでなく、死覇装も足袋も脱ぎ捨てると、素肌に藍色の粗末な単をまとった。

そして洗面所に行くと、両手を水に浸し、逆立った髪をざっと撫で付ける。

何度かやると、逆立っていた髪がしなりと崩れ、落ちてきた前髪を面倒くさそうに払った。

「うわ、隊長、ほんとそのへんのガキみたいですよ」

「うつせえよ」

障子をちよつとだけ開けてこちらを覗き込んだ乱菊を、日番谷はため息交じりに睨みつけた。

「これは潜入調査なんだ。素性がばれたら意味ねえだろ」

微笑みながら日番谷の部屋に入ってきた乱菊は、手ぬぐいを取って日番谷に手渡す。

「ま、相手が子供じゃしょうがないですね。隊長かやちるしか、適任いないんだから」

その乱菊の声に、ガシガシと頭を拭いている日番谷は返事をしない。子供扱いされるのが死ぬほど嫌いな日番谷である。

子供だから適任だと選抜されて、嬉しいはずがないだろう。

部屋の襖にもたれ掛り、惘然とした表情を、心中面白がりながら見つめていた時だった。

ヒュンッ！

突然背後から響いた、空気を裂く鋭い音。

「　　っ？」

乱菊が振り返るよりも早く、「それ」は乱菊の髪の毛の傍を飛びぬけた。黄金色の髪が数本、パラパラと宙を舞う。

「隊長っ！！」

それは過たず、手ぬぐいを片手に抱えた日番谷に向かった。

あわてて駆け寄ろうとする乱菊を、日番谷の翡翠の瞳が制した。

次の瞬間、彼の右手が、ふっ・・・と空中で消えたように見えた。

次にその手が見えた時には、その人差し指と中指の間に、一本の飛苦無　をはさんでいた。

これは・・・

一分の隙もなく磨き上げられた、その切っ先。

握り手のところには、紅い絹がくくりつけられている。

「趣味悪いな」

日番谷はそれだけ言うと、無造作に飛苦無を投げ返した。

「あまりに、只のガキに見えたのでな。心配になったのだ」

飛苦無を受け止め、懷に収めた小柄な人物を見て、乱菊は声を上げる。

「　　砕蜂隊長！」

そこにいたのは、艶めく黒髪を肩口でばっさりと断ち切り、漆黒の鋭い瞳を持つ女。

乱菊が振り返りもできないほどのスピードで、飛苦無を投げつける砕蜂といい、

それをほとんど目もくれず受け止める日番谷といい、さすがの隊長格といえる。

隊首羽織の上に締めた、琥珀色の帯を揺らしながら、砕蜂は音も無く部屋の中に踏み入った。

「俺に何の用だ、碎蜂」

濡れた手ぬぐいをパン、とはたきながら日番谷が言った。

碎蜂は、そんな世帯じみた日番谷をイヤそうに見つめた。

「お前の今回の任務に、隠密として参加せよと命じられたのだ」

「それを伝えに来たってことか。丁寧にどうも」

「私には、お前のように隠れながら、ついていく趣味は無いからな」

氷輪丸を手にした日番谷が、ちら、と碎蜂を一瞥した。

無言でその刀を一振りすると、それは一気に中指くらいの長さにまで縮小する。

それを、帯前に織り込みながら、日番谷は返した。

「俺には、お前みてえに助っ人が来たところで、イラつく趣味はねえんだ」

ムッ、と今度は碎蜂が黙り込む番だった。

ふう。

乱菊はため息をついて、肩を潜める。

この二人は、いつもそうなのだ。

顔を合わせれば言葉を戦わせるだけの仲。しかも無表情で。

二人の関係が固まる、決定的なきっかけとなったのは、とある事件・

北流魂街で、二人が初めて共闘した時にさかのぼる。

まだ根に持つてるとは。頭のいいヒトはねちっこくてイヤね。

そう思ったが、さすがに口に出すのは控えた。

根が単純な乱菊には、この二人の応酬は、見ているだけで肩がこるのだ。

日番谷は帯を締め直すと、乱菊の方へ歩いてきた。

「九十番地区『流架^{ルカ}』に今から侵入する。ついてこい、松本」
「ハッ！」

その場に不動になり、自分よりも遥かに背の低い隊長を見下ろす。
しかし、日番谷が自分よりも大きく、大きく見えるのは、何気なく
歩み寄るこんな時だった。

「先に往^いっているぞ」

その日番谷の背中に、碎蜂が声を投げつけた。
振り向きもせず、日番谷が返す。

「ああ。頼むぞ」

その言葉に、思わず乱菊が碎蜂を見やったとき、もう碎蜂の姿はどこにもなかった。

「・・・頼む、なんて。あたし言ってもらったことないですよ。隊長」

「頼めないからだ」

きわめて簡潔に、日番谷は理由を述べた。がつくり、と乱菊は肩を
落とす。

「冗談はどうでもいい」

冗談？どこが？

乱菊が聞き返す前に。日番谷は軽くため息をついた。

「気にいらねえ理由だが、こればかりは断れねえ」

「・・・そうですね。あたしも、本気でやりますよ」

こんなこと、絶対に放置できない。

子供を、権力あるものが金に任せて売買するなんて。

「分かっている」

日番谷はその、翡翠の瞳を翳^{かげ}らせ、頷いた。

「碎蜂隊長！」

碎蜂が二番隊隊舎に戻ると同時に、隠密機動の一人が、碎蜂に駆け寄った。

「第一陣が、流架に潜入成功。報告がここにあります」

「ああ。ご苦労」

渡された紙をパラパラとめくった碎蜂の顔が、見る見る間に険しくなる。

「これは・・・三隊を投入したのも、頷けるな」

「人身売買組織の長は、『流架』と名乗る銀髪の男。この男に霊圧はありません。」

しかし・・・その右腕の力は、霊圧だけは隊長格に迫ります」

「・・・真か？それは」

にわかには信じられない。

しかし、隠密機動は険しい表情のまま、頷いた。

「側近の名前は白刃。流架よりも、要注意人物です」

「・・・。シラハ？」

説明を聴きながら、しばし考え込んでいた碎蜂が、不意に顔を上げた。

「ご存知の名前なんですか？」

「・・・イヤ」

碎蜂は、すぐに首を振った。

「知っている者の名に似ていただけだ。その者は、すでに死んでいく」

直接言葉を交わしたわけでも、長い間一緒にいたわけでもない。知り合ってからわずか30分後、碎蜂の刃によって命を落とした、とある女の名だった。

・・・たった一瞬に、真紅の鮮烈な記憶を自分に残し、逝った女。碎蜂は軽く目を閉じたが、すぐにその隠密機動を睨みつけるように見た。

「第二陣、流架に向かえ！私も出る！」
凜とした声が、二番隊舎に響き渡った。

- - - - -

適当な補足。

飛苦無：忍者が使う、10センチ強の短い刃物。手裏剣みたいに
て使われることもあったとか。

分からない人は、お母さん・・・じゃない、googleに聞いて
ね（爆

あ、ついでに、「デジャ・ヴ」とは「既視感、初体験のはずなのに、
既に体験したことがあるように感じることです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1376e/>

B・B

2010年10月13日13時11分発行